

北海道上富良野にある花の公園「フラワーランド」に一本の榆の木がある。

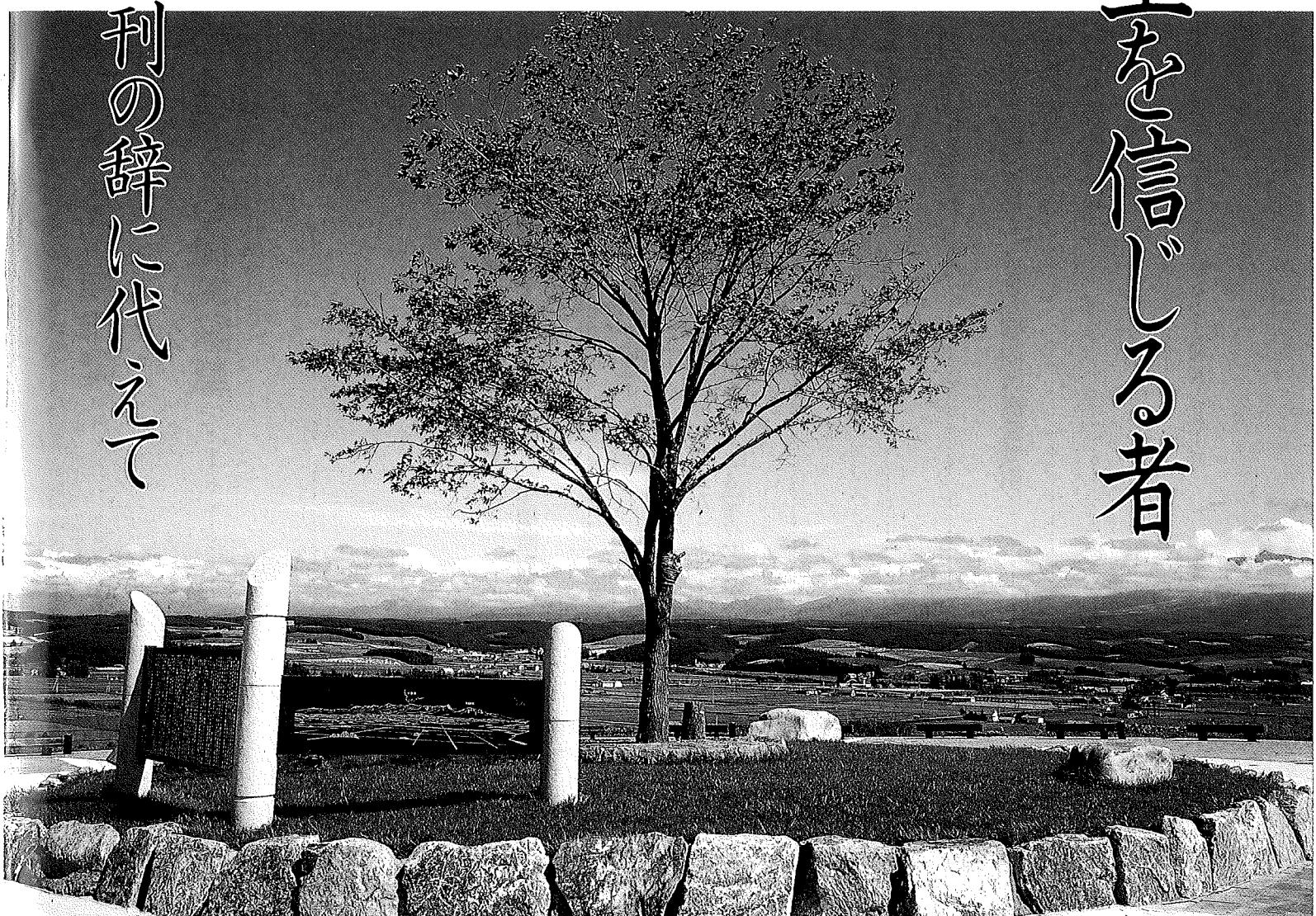
「フラワーランド」の中心、十勝連山を遠望する小高い丘に、農業者による新しい事業の創業にあたつて、代表者の伊藤孝司氏が植樹したものである。

明治三〇年四月一二日

に三重県出身の田中常次郎とその仲間たちが大木と笛の根の張る原野に入植の場と定め、おそらく火を闊みながら夢と希望と不安とが交錯する上富良野での第一夜をその下で過ごしたという榆の木に因んだものだ。先人たちによる苦闘の歴史を伝え、同時に伊藤氏自身の今を受け継ぐ者として己を律するための決意の記念樹である。

上富良野町は、入植三〇年後の大正二五年一月二十四日、十勝岳の噴火による大災害に見舞われる。噴火の溶岩が溶かした雪は泥流となり、一瞬にして一四四人の命を奪い、さうに八〇〇町歩

土を信しる者



▲「フラワーランド」に伊藤氏が植樹した榆の木

歩の水田を、浅いところでも三〇cm、深い場所では一・五mもの深さに埋め込んでしまった。開拓の志を挫かれ、農業を捨てて故郷に帰る人、あるいは新たな土地に移つていく人も少なくなかった。しかし、開拓の意志を継ぎ、再び未来を求めてモッコで山から土を運び、泥流に埋まつた田畠に客土をする人びとがいた。そして、彼らは耕し続け、土を作り続けた。

この苦闘の歴史を、目の当たりにさせてくれる実物の証拠がある。プラウメーカーのスガノ農機発祥の地、北海道上富良野に同社が建設した、土と農民魂、土を信じる人間の意志と勇気の記念館というべき展示館「土の館」に展示されたモノリス（土層標本）である。そのモノリスは伊藤氏の圃場で採取されたものだ。「土の館」に入った正面の壁に展示されている。全長四mという日本一の規模の巨大土層標本である。

幾重にも変化を見せるその巨大な土層標本は、思いのままにならぬ自然の威力を見せつける。

しかしそれ以上に見る者に感銘を与えるのは、土層標本に刻み付けられた農業者の「勇気」と「意志」の歴史である。先人たちが客土し、耕作することで守り続けた作土、いや「拓土」というべきものである。

もしかしたら他にもつと楽な道があったかもしれない。それでも先人の意志を繼ぎ未来を創るために、敢えて退路を断つ人びと。苦闘の歴史と、いかなる困難の中でも開拓者の勇気を失わぬ農業者の永続性の勝利の証明に他ならぬ土層標本

を僕は圧倒される思いで仰ぎ見た。

彼らはなぜそれほどまでに勇気があったのか。なぜ、そんなに辛抱強かつたのだろうか。

困難のなかで、その家の主人は家族に何を言い、どの未来を信じよと言ったのであろうか。そして、彼らには己の能力や未来に対してどんな確固たる自信があつたというのだろうか。

彼らは「土」をこそ信じていたのだ。

あるいは信じることができる人びとであつたのだ。土を作り、収穫しても戻し続ければ返してくれる「土」を信じていたのだ。己の力を信じていたのではないのである。それが、強い意志と未来への夢を持ち続ける勇気の源泉だつたのだ。

「フラワーランド」は、ジャーマン・アリスを中心とした花の大生産農場であり、同時に雪深い過疎地に開かれた通年開業の花の観光農園である。平成四年に開園され、全長一〇〇mの大温室を含めた三〇万m²の花園は、平成六年度の第三次造園を完了すると五〇万m²という広大な花園になる。

代表者の伊藤氏は上富良野町を代表する農業経営者一人である。上富良野の地に入植後四代を経た伊藤氏の農業経営の歴史は、冬場は出稼ぎに出る稻作の時代、麦、豆、ビート、ジャガイモなどの畑作農業の時代、そして他産地と比べた氣象や地形の条件の不利を考えての野菜作への転換。ほぼ一〇年刻みに常に将来を展望しつつ新しい農業経営への展開を図ってきた。そのつど、最先端の技術を導入して生産技術を確立するとともに、自ら販路の確保に走り回るなど、同地で

の地域農業の可能性を開いてきた。

そして今、三〇人の従業員とともに「フラワーランド」の事業を自身の農業人生の集大成として取り組んでいる。フラワーランドの仕事のかたわら、自ら販路の確保に奔走した上富良野農協での野菜生産地化への取り組みを支援すべく、雪のない季節には朝三時に起き出して始業前に野菜生産者としての作業をするという毎日なのである。

農業が人の暮らし方であった時代、人はそうしなければ生きていけない暮らしおしつけをして、「土」を作り続けた。また、誰でもがそうすれば貧しくとも食べていけることがで

きた時代であつたのだ。

そして今、ただ「稼ぎ」を求めるだけなら他に幾らでも場所はある。すでに農業はしつけで成り立つ時代ではなくなつてしまつた。

今、農業は農業経営者の時代なのだ。他のあらゆる事業と同様に、経営者の「意志」と「土」を信じる智恵においてしか農業はありえない時代なのである。自由な意志と創造力と健全なる欲望を持つ、そして何より自ら選んだ道を歩む「農業経営者」たるとする「自負」を持つ人びとの存在なくしてこれから農業はない。

今、農業を取り巻く環境が厳しいとよく言われる。しかし、農業に限らずあらゆる事業を行うこととは、そして生きることとは、常に目の前に押し寄せる泥流

の存在を意識することなのであり、また、それに埋めつくされた土地に客土し、耕しつづけることなのである。しかも、明日の晴天を笑つて待つことのできる勇気を持つことなのではないか。

努力せず不平を言うのは愚かである。

計画や計算のない事業が成り立つはずもない。現在の利益の少なさを嘆き、あるいは他人の見た目の豊かさを妬むのは恥

べきことをいとわぬ「土を信じる者」と呼びうる人びとのことである。



▶「土の館」にある全長4mのモノリス(土層標本)

だ。今日の売上や利益は経営の目的ではなく経営の結果なのであり、むしろそれは未来への手段なのである。

そしてこうも考えられないだろうか。経営者にとって「土」とは、足元の耕しつづける土であると同時に、それは家族であり、ともに汗をかく仲間であり、協力者たちであり、取引先であり、生産物やサービスを買ってもらう顧客なのではな

いのか、と。

働きかけ続け、戻し続けて、そして信じる。土を信じよう。そこに未来があるのだ。

僕は、伊藤氏をはじめ多くの農業者がからそれを学んだ。そして、農業者とともに歩み、その勇気を示す展示館を作ったことは、常に目の前に押し寄せる泥流

の存在を意識することなのであり、また、それに埋めつくされた土地に客土し、耕しつづけることなのである。しかも、明日の晴天を笑つて待つことのできる勇気を持つことなのではないか。

努力せず不平を言うのは愚かである。

この小さな雑誌は、「農業経営者」を読者としたい。経営規模の大小でも、売上規模の大きさでもない。永続性のために未来へ投資をし、それに汗をかくことをいとわぬ「土を信じる者」と呼びうる人びとのことである。

本誌の目的は、農業機械を中心とする情報提供を得やすくするシステムをとつた。ご利用頂きたい。

本誌は、現代の誇り高い農業経営者の同僚者として、多くの企業や職業人たちとともにその末席にいたいと願うものである。末長いご購読とご支援をお願い申し上げる。

考えて、広告だけでなく掲載記事情報についても、本誌が仲立ちとなり企業からの情報提供を得やすくするシステムをとつた。ご利用頂きたい。

本誌は、現代の誇り高い農業経営者の同僚者として、多くの企業や職業人たちとともにその末席にいたいと願うものである。末長いご購読とご支援をお願い申し上げる。

平成五年五月二八日